16話　祇園祭 …… スサノオノミコトの威力

平成十四年七月十六日

京都の七月は、祇園祭一色に染まる。一日の吉符入、二日の籤取式、十日ごろから鉾と山を建て始め、十三日に長刀鉾の稚児社参、十五日の宵宮祭、十六日の宵山などを経て、十七日の午前に山鉾巡行、同宵（夕方～夜分）の神幸祭、その一週間後、二十四日の午前に花傘巡行、同宵の還幸祭があり、三十一日に八坂神社境内での夏越祓を以て、一連の行事が終わる。

では、これほど大規模な祭を、なぜ七月（旧暦六月）に行うのだろうか。その起源は平安前期に遡る。いわゆる四神相応の地形に恵まれた平安京の人口は、九世紀代に十万近くなったと推定される。こうした都市では、蒸し暑い夏に疫病が発生し伝染して、多くの人命を奪う恐れが大きい。そこで、疫病が外から疫神によりもたらされる、と信じていた当時の人々は、それが居住区域に入らないよう防ぎ止め、もし入っても外へ払い除くため、威力のあるカミを迎えその防除に努めてきたのである。

かような疫病防除のカミとして祀られ、今なお広く信じられているのが、スサノオノミコトという荒々しい男神にほかならない。ただ、その由緒は複雑であって、さまざまな説が唱えられている。ここに主な所伝を紹介しておこう。

まず『日本書紀』の神代紀に「素盞嗚尊は新羅の国に降到まして曾尸茂梨の処に居す」とある。このソシ・モリは韓語で牛・頭を意味する。ところが、牛頭天王といえば、印度伝来の仏教守護神であり、疫病などを防除するため武装して手に塔をもつから「武塔神」とも称される。

しかも、『備後国風土記』（逸文）によれば、この武塔神が「須佐雄能神」にほかならない。このカミを親切に饗した「蘇民将来」の子孫たちは、疫病が流行しても「茅輪を以て腰の上にあつれば（疫気を）免れん」と約束された。それ以来、正月の門飾に「蘇民将来子孫之家」と書いた札を掲げておき、また旧暦六月末の夏越祓に茅輪を潜れば、疫病を防ぎ除くことができるようになったという。

この牛頭天王＝武塔神＝スサノオノミコトは、初め播磨（姫路市郊外）の広峯山に祀られていたが、やがて平安京東郊の北白川へ遷り、さらに九世紀中葉（貞観・元慶年間）、八坂郷の現在地に鎮座すると、「疾疫たちまち除却」の霊験を顕された。そこで、時の摂政藤原基経は印度の祇園長者に肖って精舎を建て社壇とした。それゆえ当社は「祇園社」とも称されることになったと伝えられる。

従って、祇園祭の見所は、盛大な山鉾・花傘の巡行もよいが、十七日宵にスサノオノミコトたちが八坂神社から御旅所へ神幸され、その一週間後に還幸される神輿の巡行であり、それを拝することに極めて深い意義がある（拙著『京都の三大祭』角川選書参照）。